

ルーズベルトの刺客

西木正樹

FOR
PRESIDENT

ENT



FRANKLIN D.
ROOSEVELT

ルーズベルトの刺客

西木正明

新潮社

ルーズベルトの刺客^{しきやく}

印刷——一九九一年三月二〇日

発行——一九九一年三月二五日

著者——西木 正明（にしきまさあき）

装画——岡本三紀夫

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

住所——162 東京都新宿区矢来町七一

電話——
（業務部）03（三二六六—五一一）
（編集部）03（三二六六—五四一一）

振替——東京四—八〇八

印刷所——東洋印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

© Masaki Nishiki 1991, Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-379301-5 C0093

目次

第一章 戦雲

5

第二章 マヌエラの肖像

70

第三章 死闘

136

第四章 孤島の夢

226

第五章 流転

270

ルーズベルトの刺客

第一章 戦 雲

身じろぎしたとたん、硬い音が闇に響いた。脇の下に釣っているモーゼル一号拳銃の銃把が、川原の砂利に触れたのだ。

「静かにしろ」

間髪をいれずに、押し殺した声が飛んで来た。十メートル足らずの所に相棒の張士達ちようしたうが腹這いになり、伏射の姿勢を取っている。

「すまん」

謝公林しゃこうりんは小声で謝った。かれこれ一時間以上、同じような格好で川原に伏せている。手足はしびれ、すでに痛さを感じなくなつた。

——うまく撃てるかな。

そんな危惧きぐが頭をよぎつた。しかし、銃をかまえてい

ないだけ、自分はまだ楽だと謝公林は思った。張士達はもつとつらいはずだ。

前方で水音がしている。永定河の流れが約二十メートル先にある。しばらく雨が降っていないので、流れが細くなっている。流れの幅はおよそ五十メートルと、昼間の偵察で見当をつけてある。瀬音に混じって、大勢の人間が動きまわるざわめきが対岸から聞こえて来る。謝公林と張士達は、先刻から全身を耳にしてその動きを追っている。

「まだかね。もう十時をまわっているが」

謝公林は視線を前方の闇に向けたままつぶやいた。暗闇の中でモーゼル九八式洋鎗ようちゆう（小銃）の引金に指をかけて、息を殺している気配だけが伝わってくる。

謝公林は張士達の緊張持続力に舌を巻きながら、顔を仰むけて星を探した。夕方は晴れていたが、その後雲が広がったらしい。星は見えず、漆黒の空間が覆いかぶさってきている。晴れならば、銀河をはさんで七夕の織姫と牽牛けんぎゆうが見えるはずだ。北京大学二年に在学中の謝公林は、子供の頃から星が好きだった。天津の富裕な商家に生まれた彼は、文科系の教員になるつもりで大学に入つた。そういう境遇だから、内陸の山西省太原郊外で極貧農の長男として育つた張士達とは、根本的なところで意

識がちがうという、負い目に似た思いがある。この時も張士達が発する硬い緊張感に、息苦しくなるほどの圧迫感を覚えながら川原に横たわっていた。

ふん、と張士達が鼻をすする音がした。日中は蒸し暑かったが、夜になって急に気温がさがった。初夏とはいえ、夜の北支はまだ寒い。

一九三七年七月七日夜。北平（北京）西方郊外を流れる永定河の中洲に、謝公林と張士達が黒い袍子（パオ支那風長衣）姿で這いこんだのが、午後八時すぎ。五十メートルほど下流に、北平から漢口にむかう幹線鉄道京漢鉄路の鉄橋が、おぼろなシルエツトとなつて川を横ぎっている。さらにその二百五十メートル下流にあるはずの蘆溝橋は、完全に闇に溶けてしまい、謝公林たちの位置からは見えなかった。

突然、闇を切り裂いて号令がかかった。

「接敵訓練止め！ 明日黎明時まで休憩！」

とたんに、対岸の暗黒を支配していた緊張が崩れた。ざわめきが大きくなる。

「あーあ、やばちなあ。朝までここさいるのか」

「こら、班長殿さ聞けるべよ。うぬ、黙つてれ」

「俺のあばだばよ、まずこういう暗い所が好きで、すぐにこう……」

「馬鹿野郎、静かにせ。ごしやかれるぞ」

日本語でふざけあう男の声が、微風に乘つて聞こえてくる。

「奴ら、何と言っているのだ？」

張士達が小声で聞いた。謝公林は顔をしかめてわずかのあいだ考えこんでから答えた。

「はじめの号令はわかる。明朝明け方まで休む、と言つたのだ。しかし、その後のやりとりはまるで理解できない」

「なんだと？ 奴らは日本語でしゃべっているのだから？ それとも暗号を使っているのか？」

「いや、そうとは思えない。どこか地方の方言のようだ」

「あんな小さな国にも方言があるのか」

「あるらしい。そう聞いたことがある」

謝は北京大学近くのアジトで、有志と共に日本語を習っている。抗日戦士として、敵と接触して情報を取ったり、手に入れた文書を解読するためだ。一年余りの特訓で、謝の日本語はかなりの水準に達していた。日常の会話には、まず不自由を感じないほどである。それなのに、いま間近な暗がりの中から聞こえてくる言葉は、まったくといっていいほど理解できない。

謝公林が彼らの言葉を理解できなかったのは当然である。彼らの眼前に夜間訓練のため展開していた日本軍は、東北の秋田地方の出身者で編成された部隊だった。北平駐屯の第一連隊傘下の第三大隊に属する、第八中隊である。

二日前の七月五日夕刻。北平市朝陽門大街に面した北京大学校舎の北側に、四条胡同という狭い路地がある。表通りの華やかさとはうってかわって、崩れかけた煉瓦造りの古家が軒をならべる、さびしい通りだ。この道路の西端近くに、周りのボロ家よりもさらに古い二階家がある。この家の階上の一室に、鋭い目つきをした若い男たちが集まり、昼過ぎから白熱した議論を続けていた。

会合をとりしきっているのは、細面の小さな顔に柔和な笑顔を絶やさない、北京大学図書館員の胡服という男である。ひととおり活動方針に関わる議題を討論し終えたところで、胡服が「さて」と話題を変えた。

「あさって日本軍が、永定河東岸の龍王廟びょう近くで夜間演習をやるそうだ」

胡服がそう言った時、最前席にいた張士達という男が椅子を鳴らして立ちあがった。

「やりましょう、あの計画を」

胡服は赤銅色に日焼けした張の顔を見た。笑い顔のまだが、目は笑っていないかった。

「簡単に言うが、ひとつまちがったら、実行した者の命はないぞ」

「もとより覚悟の上です。しかし日帝は今、さらなる侵略を強行するための口実探しにやつきになっています。何かエサを投げてやれば、待ってましたとばかりに食いついて来るでしょう。この機会を利用しない手はありません。これは同時に華北における蔣介石の威信をたたきつぶす絶好の機会でもあります」

「それは君の言うとおりだが……」

後に劉少奇と号し、国家主席まで登りつめた中国共産党北方局書記胡服は、気負いたつ張を前に一瞬のためらいを見せた。この前年の十月、毛沢東指揮下の共産党中央は、後に長征と呼ばれる長い旅を終えて、内蒙古との境界近くの辺境、延安に拠点を移していた。長征は、蔣介石との長期にわたる戦いで消耗した戦力の回復と、革命闘争の再構築をめざしたものであった。しかし、長征の途中でも蔣介石軍とたびたび交戦を余儀なくされ、延安にたどりついた時は、当初三十万人以上いた勢力が、実に十分の一近くの三万人余りにまで激減していた。

そのために、毛沢東は一時的に国民党との妥協を決意

し、蒋介石に対し内戦停止と、国共合作による抗日救国を呼びかけて来た。だが、あと一息で共産党の息の根を止められると信じていた蒋介石は、毛沢東の呼びかけを黙殺した。妻の宋美齡の兄宋子文は、ハーバード大学でルーズベルト米大統領と同窓で、親友の間柄だ。これはアメリカの援助を得るには望みうる最高のつてといつていい。蒋介石は宿敵共産党と合作せずとも、単独で抗日救国を闘い抜けると信じて疑わなかった。

そうした蒋介石の自信をくつがえす必要がある。もつとも理想的なのは、日本軍と蒋介石軍の大規模な衝突騒ぎが発生し、両者共に消耗するという形である。胡服たちは、その引金となる工作の実施を、長期にわたって検討してきた。その中から出て来た結論が、日本軍が頻繁に行なう夜間演習の利用だったのだ。

「君のいうように、絶好の機会ではあるけどね。はたしてこっちの思惑どおりに、奴らが動いてくれるかどうか」

胡服はあくまで慎重だった。この作戦は、蒋介石軍と対峙している日本軍にむけてはじめて効果がある。さもなくば、単に無謀な挑発行為に終り、実行担当者は大死することになりかねない。

「胡服同志、これまで鄒大鵬同志の情報に一度でも誤り

がありましたか？」

張は語気を強めた。

「このためにわざわざ、何か月もかけて噂をふりまいたんじゃあないですか」

「そうだったな」

胡服は張のけんまくに苦笑しつつうなずいた。

——夏ごろ、日本軍と民国軍のあいだで大戦争がはじまる。

こういう流言が、五月頃から北平を中心とした華北一帯に広がっている。胡服たちが主として学生の細胞を使つてまき散らしたものだ。噂は、あつというまに伝播していった。日本軍の憲兵隊が、血眼になつて噂の出所を探索していることも、胡服たちは承知している。これらはすべて、来るべき本工作のための下準備であつた。つい先日、そうした準備を完了させるにふさわしい情報、胡服のもとにもたらされた。七月一日夜のことである。

——来る七月七日夜半から八日未明にかけて、豊台駐屯の日本軍が夜間接敵演習を行なう。場所は、永定河にかかる蘆溝橋北方左岸一帯龍王廟付近。

この情報をもたらしたのは、蘆溝橋のたもとにある宛平県城に駐屯する、元チャハル省主席宋哲元に指揮され

る第二十九軍の作戦主任參謀鄒大鵬だった。彼は表むきこのような身分だが、正体は第二十九軍にもぐりこんだ共產党オルグのリーダーで、これまでも日本軍に関する正確な情報を多数送って来ていた。

鄒大鵬は中華人民共和国成立後、中央軍事委員会情報部長、党中央社会部副部长などを歴任した、特務工作畑の俊英である。

第二十九軍は、南京にある蒋介石政府の直轄軍ではない。それどころか、かつては自軍の權益を守るために蒋介石と戦ったことすらある。しかし、満州事変勃発後は、とみに抗日意識を強め、北支にまで手がまわらない蒋介石軍にかわって、日本軍と対峙している。それだけに、この中に身を置くと、日蔣双方の情報がきわめて得やすいという利点があった。

その鄒大鵬がもたらした情報である。確度はきわめて高いと胡服たちが判断したのも当然であつた。

「ためらっている時ではないと思います。こんな好機は二度と得られないかも知れないですよ」

こめかみに血管を浮きたたせて言う張に、胡服は、わかつたというふうにならずいてから、おもむろに口を開いた。

「よし、決行しよう。誰か志望者はいるか」

アジトの狭い部屋には、総勢十四人の若い男たちがいた。北京大学学生会主席劉玉柱以下の、若き活動家ばかりである。この中の何人かは、日本軍の憲兵隊のブラックリストにも載っている。

胡服の言葉が終らないうちに、また張士達が立ちあがつた。

「自分が行きます。この時のために銃の扱いを学んだようなものですから」

胡服はわずかのあいだ眉をひそめて考えた後、

「いいだろう」

と言つた。たしかに、銃の扱いにかけては張がいちばんである。ただ彼は、何事にも激しやすい性格なので、冷静な判断を求められる局面でやや不安な部分がある。

誰か、ブレーキ役を同行させよう。瞬時のうちに、胡服はそう腹を決めた。そして、目の前にならんでいる若々しい顔をゆっくりと見まわした。

「難しい任務だから、単独では無理だ。掩護する者が必要だろう」

「わたしは張君といっしょに行きます」

そう言つて同時にふたりの若者が立ちあがつた。韓福珍と謝公林だった。韓も張におとらず行動力のある男だ。いっぽうの謝公林はふだんは北方局発行の新聞編集にた

ずさわっている、地味な性格の青年である。肩幅が広く厚味のある身体つきをしているが、背だけはあまり高くない。一メートル六十五センチほどもあるうか。丸顔の狭い額に、油気のない髪の毛がたれさがり、目はいつも眠たそうに細められている。細身ながら日に焼けて精悍な印象の張とは対照的に、色が白くて鈍重な印象だった。

「三人は多すぎる。じゃあここは、わたしに決めさせてくれ。謝君、君が行け。君は日本語が出来るから、敵の動きをつかみやすいだろう」

「わかりました」

謝は表情を動かさずにうなずいて、もっさりとして席に着いた。ゆったりとした謝の動作を見ているうちに、胡服はかんじんなことを聞き忘れたことに気がついた。

「謝君、君は銃を扱えるのかな」

謝はこころもとなさそうな笑いを浮べた。

「いちおう訓練を受けましたが、どうも射撃には適性がないようです……」

案の定だと思いながら、胡服は苦笑した。

「だいじょうぶだ。扱い方さえ知っていれば用は足りる。君はピストルを持っていけ」

この時彼らの手元には、たった二丁の銃しかなかった。

いずれも第二十九軍に潜入している鄒大鵬以下の党細胞が部隊の装備から横流ししてくれたものである。蒋介石軍制式銃の、モーゼル九八式洋鎗と、同じくモーゼル一号拳銃が、それぞれ一丁ずつ。もちろん、必要とあらばもっと多数の火器も入手可能である。しかしその時間がないし、工作の内容からして、これで充分とも言えた。

散会前、胡服は最後の注意をふたりに与えた。

「わが党、ひいては中国人民すべての命運が、君たちふたりの肩にかかっている。それほど大切な作戦だ。また先刻から再三言っているように、危険この上ない作戦でもある。工作を終えたら、大急ぎで現場を脱出すること。いかなる事態が発生しても、かならず帰還せねばならない。傷ついて捕虜になったり射殺死体を日本軍の前にさらすようなことがあれば、重大な結果を招く。革命の前途にも影響する。このことをけっして忘れないでほしい、同志たち」

「明朝黎明時まで休憩？ それはつまり、もう銃の発射はない、という意味か。話がちがうじゃないか、おい」

怒気を含んだ声で、張士達が謝公林にささやきかけた。「そいつはえらいことだ」

鄒大鵬からの情報では、日本軍は仮の敵味方に別れて、

実戦ながらの演習を行なう、ということだった。

——攻手側は、永定河の堤防を背にして布陣する。そして、仮設敵となる側は龍王廟^{びりやう}手前の山側に陣取る。攻撃側は小銃を、仮設敵側はもっぱら機銃を使用する予定。

鄒大鵬の情報は、このように詳細をきわめたものだった。これをもとにして、胡服は次のような作戦を、謝たちにさずけた。

「攻める側が背にして布陣する永定河の堤防は、二十九軍の重点守備地で、小隊規模の守備隊が常時駐屯して警備している。これがつきめだ。山側に陣どった日本軍の仮設敵が空砲を発砲しはじめたら、すかさず攻撃側の背後から撃て。堤防にいる二十九軍兵が、銃声に誘発されて撃つようにだ」

渇水期の今は、京漢鉄路の鉄橋の橋脚が設置されている中洲の面積が広がり、日本軍陣地の近くまで達している。夜陰に乗じてこの中洲に入りこみ、日本軍の背後を襲うには絶好の地形だった。

二十九軍の発砲だと日本軍に確実に思いこませるために胡服は鄒大鵬に連絡して手の込んだ事前工作をさせた。当日の朝から、鄒の指揮下にある兵士を動員して、堤防ぞいに散兵壕^{さんぺいこう}を掘らせたのである。夕刻近く、演習を行

なう日本軍豊台駐屯部隊第八中隊が現場近くに到着した時、彼らはまだ、さかんにスコップをふるっていた。このため第八中隊は、演習開始を午後六時すぎまで遅らせた。そして、日が沈んでも二十九軍側が作業をやめないで、それを尻目に演習を開始したのだった。

あたりが完全に暗くなった頃、二十九軍兵は、一部を見張りに残して宛平県城に引揚げた。かわって下流の蘆溝橋付近から、川原に入った張士達と謝公林が、足音を殺して日本軍後方の中洲に潜入した。ここまではきわめて順調に事が運んだ。あとは、日本軍の仮設敵の空砲が、闇に響くのを待ただけだったのである。ところが、いかなる事情かは知らないが、日本軍はこの夜の演習を中止するらしい。張士達が慌てたのも無理からぬことであつた。もし、明朝黎明時に射撃演習をやられても、謝たちは手を出せない。あたりが明るくなつてしまえば、背後から撃つて二十九軍のしわざと誤認させることなど不可能になるからだ。かりに強行すれば、謝と張は日本軍第八中隊百三十五名を相手に戦うことになる。それこそ大死以外のなにものでもない。

「こうなったら引揚げるしかないのか。ちくしょう、帰りぎわに一発ぶちこんでやろうか」

張がいらいだに言つた。

「まあ待て。まだ夜は長い。すこし様子を見て、何事も起らないようだったら退却しよう」

謝が張をなだめた。その時また、大音声が闇をつんざいた。

「伝令！ 仮設敵に演習中止、明朝黎明時までの休憩を伝えろ！」

「はい！」と声がして、続いて命令を復唱するのが聞こえた。謝は首を振った。

「張君、やっぱり引揚げたほうがよさそうだ」

そう言つて伏せていた上半身を起こした。いつの間にか薄雲が消え、天空に星が散つていた。あまり晴れてほしくない、退却にさしつかえる、と謝は思った。今はとても、星をめであるような気分にはなれない。

その時、まったく突然に銃声が涌いた。連続する機銃音である。

「こらあ！ 何をやっておるかあ」

先刻の指揮官が、声を張りあげて怒鳴っている。しかし銃声は止まない。演習中止を伝えに行つた伝令を、仮設敵側が攻撃側の接近と誤認したらしい。

「止めろというのに、わからんのか！」

指揮官の声がいらだつた。と、急に銃声がとどえた。

伝令が仮設敵の陣地に達したのだろう。

静まりかえつた永定河の川原に、張士達が深く息を吸いこむ音が、かすかに広がった。謝はまだ上半身を起こした姿勢で、前方の闇を見つめていた。

次の瞬間、至近距離で銃が鳴った。激しい音圧を感じて謝は川原の砂利の上に突つぷした。その音は、先刻の軽くて遠い機銃音とは違つて、耳からだけではなく、衣服を貫通して、毛穴から体内にしみこんできた。

一発目の余韻が消えないうちに、二発目が発射された。続いて、もう一発。

前方に広がる闇が、急に凍りついたように硬くなった。こそ、とも音がしない。ややあつて、予期せぬ方角からの銃撃に仰天して、大勢の人間が息をひそめている気配が、じわりと伝わつて来た。やがてまた、指揮官らしい男の声が聞こえた。

「なんだ、今のは？」

「実弾のようであります。土手の方向から撃つて来ました。支那軍の散兵壕からだ、自分は思います」

「支那軍の散兵壕から……？ だが、応射してはならん！ 人員点呼！」

「はい、人員点呼いたします！」

一、二、三、四……と、点呼の音が飛びかうのを、謝と張は息を殺して聞いていた。彼らが描いた予定図では、

支那軍の射撃に対して、日本軍はすぐさま応射をはじめ
るはずだった。いっぽう、昼間掘った散兵壕に身をひそ
めて日本軍の動きを見張っていた支那兵は、日本側の射
撃を自分たちに対する攻撃と思いこんで応戦する。これ
が発火点となり、戦闘は豊台に駐屯する日本軍と、宛平
県城にたてこもる支那側二十九軍とが本格的な戦いをは
じめる……。

しかし、事態は彼らが狙った方向には動いていない。

「もつと撃たねばだめか。ひとりふたり狙い撃ちして倒
せば効果てきめんだろうが、この闇じゃあな」

張がつぶやいた。

「もう一、二発撃ちこんで見るか」

「待て。今は撃たぬほうがいい。奴らの注意がこつちに
集中している。このまましばらく様子を見よう」

やがて、闇の彼方で点呼が終った。

「点呼終り！ 一名欠員あり！ 志村二等兵の所在が不
明であります」

「なに？ ひとりおらん？ ——よし、集合ラッパを吹
いてみる」

「はい！」

まもなく、時ならぬ集合ラッパが、暗い平原から川原
へと吹きぬけて来た。しばらく静寂があった後、また指

揮官の声がした。

「帰って来たか？」

「まだであります！」

「山田、西村、細野、志村を探してこい！」

「山田、西村、細野は、志村二等兵を探索してまいりま
す！」

「岩谷、貴様は大隊本部まで急行して、中隊が不法に銃
撃された件および行方不明者発生の件について、大隊長
殿に報告してこい。あわせて、さらに銃撃を受けた場合
の対応について、指示を受けてこい」

「わかりました。岩谷曹長、大隊本部へ急行します」

謝と張は、息を殺して、これらの動きを追っていた。

二十分後、闇の奥がにわかになわついた。

「志村二等兵を発見いたしました。無事であります」

「そうか。奴は、何をしとったのだ」

「暗がりの中で、道に迷ったと申しております」

「しようない奴だな」

張がまた、じれたような声を出した。

「おい、いつまでこうしていてもしょうがない。何発か
ぶちこんで、おさらばしよう」

「待つんだ。さつき、本隊に伝令が飛んだ。もうしばらく
くすると、奴らがどう動くかわかる。それまで粘って見

よう」

事態がどう展開するか、まだわからない。しかし、謝は指揮官が伝令を走らせたことを重視した。うまくすると、増援部隊が出てくる。追い撃ちをかけるのは、それからでも遅くはない。

また、つらい待機がはじまった。前方の闇の雰囲気も、しだいに緊張感が失われていくのがわかる。彼らは、伝令の帰還を待つて行動方針を決めるつもりらしい。

夜半がすぎ、日付が変わって七月八日になった。先刻いったん晴れた夜空をまた雲が覆つたらしく、闇がいつそう深まった。そのうちに漆黒の天空から、ぼつりぼつりと雨粒が落ちて来はじめ、やがて本降りになった。

ずぶ濡れになりながらも、張士達と謝公林はなお、川原に伏せて待ち続けた。

午前二時、遠くにいくつかのライトが点滅しはじめ、それに規則正しい行軍の足音がかぶさった。

「おい張君、どうやら狙いどおりになって来たぞ」

謝は緊張に声をふるわせながら、声を殺してそう言った。やがて、これまでとは比較にならないざわめきが、対岸を支配した。時折「大隊長殿！」という声が聞こえる。

「やはり、豊台の本隊が出て来たぞ。ぼつぼつやるか」

「よし」

謝の声に、張はいきおいこんで返事をすると、銃を構えなおして無造作に発砲した。一定の間隔を置いて、三発の銃声が、永定河の川原に響きわたった。

「この野郎！」

闇の中から怒声があがった。続いて、

「応戦開始、撃て！」

と、叫ぶ声がある。たちまち、無数の銃声が涌き起り銃弾が謝たちの頭上でうなりはじめた。それを待ちかまえていたように、散兵壕のある堤防付近からも銃声が起こった。

「脱出しよう」

謝公林と張士達は、下流の蘆溝橋めざしてイモリのように這いはじめた。

風雅な伝説に彩られた七夕の夜を、修羅場と化した北支の蘆溝橋ですぐす羽目になり、以後八年余におよぶ侵略戦争の口火を切る役割を演じた秋田出身の兵士たちは、めぐりあわせとはいえ、やはり不運であった。彼らの大部分は、後年ガダルカナルに転戦し、南太平洋の藻屑もくずとなつて消えた。

しかし、修羅場は戦場にのみあるのではなかった。北